



石川 達三 いしかわ たつぞう

生まれた場所：横手市

生まれた年：1905年

なくなった年：1985年

社会の問題と其中で生きる人々をえがいた小説家

石川達三は、今から100年以上前の1905年、横手市に生まれました。お父さんは中学校で英語の先生をしていました。お父さんの仕事の関係で、達三は岡山県や東京都で育ちました。早稲田大学第二高等学院（今の高校にあたります）のときに書いた小説「幸福」が賞を受け、賞金をもらった達三は、その賞金をもとに早稲田大学英文科に入学しました。22歳のときのことです。しかし、1年で大学をやめてしまいました。

達三は25歳のとき、ブラジルへの移民船（日本を出て、ブラジルではたらこうとする人の船）に乗りました。そして、5ヶ月間ほどブラジルの暮らしを体験して帰ってきました。その体験をもとに達三は「蒼氓」という小説を書きます。何度か書き直したあと、30歳で雑誌に発表して、「蒼氓」は、第1回芥川賞（芥川賞というのは、すぐれた新人の作品を取り上げるもので、この賞を受けることはたいへんすばらしいことです）を受けました。達三は、小説家としての立場をたしかにしたのです。

「蒼氓」では、生活が苦しいために、日本をすててブラジルにわたろうとする農民のなやみや不安、そして移民をすすめる日本の社会の問題などがえがかれているのです。

それから達三は、次々と話題作を発表していきます。小学生や中学生が読むにはむずかしい作品が多いですが、どの作品でも、時代が大きくかわっていく中で生きていこうとする人間の強さや弱さ、そして日本の社会のよい点や悪い点がえがかれています。ですから、戦争にすすみつつある日本の社会の中では、せっかく書いた小説が発表できないこともありました。達三のような小説家にとっては、苦しい時代であったでしょう。

達三が40歳のとき、とうとう第二次世界大戦が終わりました。戦争の前には書けなかったことも、自由に書ける世の中になり、達三は小説家として、たくさんの作品を発表していきます。その作品の多くが大きな話題になり、たくさんの人々に読まれました。

達三の作品としては「人間の壁」「金環蝕」「生きてある兵隊」「風にそよぐ葦」などがゆうめいです。

44歳のときには、第1回に自分が受けた芥川賞を選ぶ委員になりました。また47歳で日本文芸家協会理事長に選ばれ、小説家たちの団体のまとめ役となりました。

64歳のときには、菊池寛賞というすばらしい賞を受けました。そして、70歳で日本ペンクラブ会長になるなど、文章を書いている人たちの代表としてもかつやくしました。71歳のときに、芸術院会員に選ばれました。これもまた、めいよあることでした。

文学の世界に大きな歩みをのこした達三は、79歳で亡くなりました。秋田市立中央図書館明徳館には「石川達三記念室」があり、私たちは今でも達三の歩みを知ることができます。みなさんも大人になったら、達三の小説をぜひ読んでみて下さい。